

Abstract

On Grammaticalization of Japanese and Thai Emergence Verbs

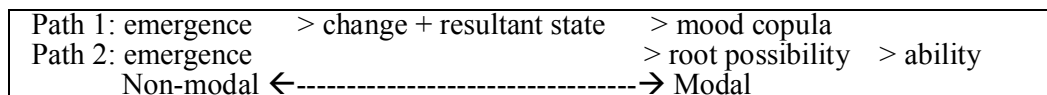
Kiyoko Takahashi
Kanda University of International Studies

Rumiko Shinzato
Georgia Institute of Technology

‘Arrive’, ‘get’, ‘know’ and ‘suitable’ have been identified as source grams for the target lexical item expressing ‘ability’ (Bybee, Perkins & Pagliuca 1994; Heine & Kuteva 2002; Traugott & Dasher 2002). Furthermore, it is generally believed that ‘root possibility’ or ‘participant-external possibility’ evolves out of ‘ability’ or ‘participant-internal possibility’ (Bybee et al. 1994; Sun 1996; van der Auwera & Plungian 1998; Heine & Kuteva 2002; Traugott & Dasher 2002): ability > root possibility.

Through the study of corpus data both from Japanese and Thai, this study found amazingly similar grammaticalization paths in them regardless of the genetic unrelatedness of the two languages. Specifically, this study claims that:

- 1) ‘emergence’ should be added to the list as a source gram since in both languages, it is the emergence verbs such as *naru* and *dekiru* (Japanese) and *dây* (Thai) that evolved or are evolving into a modal for ability;
- 2) the directionality of change was from root possibility to ability, not the other way around, as schematized below;



- 3) the potential meaning (root possibility) was triggered by the existence of a negative element.

The semantic expansion from non-agentive emergence verbs to acquire the agentive sense of ‘ability’ is illustrated as a process whereby conversational implicatures are conventionalized by ‘pragmatic strengthening’ (Traugott & König 1991).

On a more language specific note, this paper disputes the view permeated through the existing studies that the original meaning of Thai *dây* is volitional, as in ‘get’, or at least requires a certain human being to become the possessor of something emerged, as in ‘acquire (come to have)’ (Enfield 2000, 2003, 2004; Matisoff 1991; Meesat 1997; Diller 2001). Incorporating the findings from the corpus data and facts overlooked or dismissed before, this paper argues that Thai *dây* was a non-volitional emergence verb.

Finally, this paper suggests that these two opposing directions of semantic change, namely root possibility > ability, or vice versa stem from their typological difference between Japanese / Thai and English / Chinese as ‘situation-focus’ vs. ‘agent-focus’ languages (Hinds 1986), or BECOME-languages vs. DO-languages (Ikegami 1991).

日本語とタイ語の出現動詞の文法化

高橋清子
神田外語大学

新里瑠美子
Georgia Institute of Technology

1. はじめに

近年、文法化に関する理論構築の試みが盛んである。可能というモーダルな意味を表す語（可能モーダル）の文法化についても多くの論考があるが、可能モーダルの起源語は「至る」「得る」「知る」「適切な」といった意味を表す語であり、可能モーダルは「能力可能（動作主可能）から状況可能（根源可能）へ」という方向で意味が拡張したであろうという説が主流を占める (Matisoff 1991; Bybee et al. 1994; Sun 1996; van der Auwera & Plungian 1998; Heine & Kuteva 2002; Traugott & Dasher 2002)。本研究ではコーパスデータを用いて日本語とタイ語の可能モーダルの成立過程を調査し、その文法化の方向性や段階について両語の異同を探った。その結果、両語の可能モーダルの文法化には多くの共通点があることがわかり、以下の仮説が導き出された。

- 1) 両語の可能モーダルの起源語は物事の自発的・突発的な出現を表す動詞（出現動詞）であった；
- 2) 両語の可能モーダルは否定形でまず状況的な不可能の意味を表すようになった；
- 3) 両語の可能モーダルの意味は欧米の通説と異なり、「状況可能から能力可能へ」という方向で拡張してきた、あるいはしつつある。

もしこれらの仮説が正しいとすれば、これまでの文法化研究では明らかにされていなかった新たな知見を本稿は提供することになる。(注1) 本研究の目的は、元々出現動詞であったと考えられる日本語の**なるとできる**およびタイ語の**dây**がそれぞれどのような文法化経路を辿ってモーダル形式へと発展していったのかという問題について、通時的資料を示して実証的に論じることである。文法化の各段階における意味変化の要因についても認知語用論の理論を援用して考察する。

タイ語の**dây**の文法化はこれまで英語の *can, get* や中国語の**得**の文法化 (Bybee et al 1994; Sun 1996; Lamarre 2002) に重ねて論じられることが多かった。(注2) しかし**dây**の可能モーダルへの意味変化は、**得**の意味変化 (Shi 2002) に似ている部分があるものの、全体的な方向性から言えばむしろ日本語の**なるとできる**の意味変化 (渋谷 1993; Shinzato in press) に近いことが本研究の通時的調査によって明らかになった。日本語とタイ語は系統的小よび地理的に遠い言語同士であるにもかかわらず、可能モーダルの文法化経路がほぼ一致しているという事実は言語類型論の観点から興味深い。

2. 分析結果

日本語の**なるとできる**の使用例は上代から近代にわたり採集したが、残存資料の限られているタイ語の場合はスコータイ碑文の時代以降 (13 世紀末以降) のコーパスから**dây**の使用例を収集した (本稿末に付した資料リストを参照のこと)。まずそれらの語が使われている文脈や統語形式からそれらの語の意味を解釈し、それぞれどのような意味用法に分類可能かを考えた。**なる, できる, dâ**yには「出現」、「変化とその結果状態」、「ムードコンピュータ」(沢田&コモンワニク 1993)、「可能 (状況可能および能力可能)」と便宜的に呼ぶことができる意味用法があることがわかった。それぞれの意味用法の関連性、それぞれの意味用法が出現した時期や使用頻度の変遷、それぞれの意味用法を担う統語形式の変遷などを考察し、日本語とタイ語の出現動詞の文法化経路を表1のように想定した。

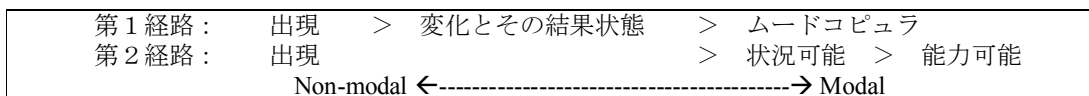


表1: 日本語とタイ語の出現動詞の文法化経路

なる, できる, dâyの意味変化に共通する特徴は以下の通りである。

- 1) いずれの語も元々は出現動詞であり、自然発生的な物事の出現を表していた；
- 2) 突発的な物事の出現だけでなく、ある状態からある状態への変化も表すようになった (第1経路)；
- 3) 節を補語 (complement) としてとり、否定形で多く使われるようになり (「**ならぬ**」「**できぬ**」「**否定辞 dâ**y」)、「状況が許さず当該事態が出現しない」という状況不可能の意味を表すようになった (第2経路)；
- 4) さらに肯定的な可能の意味も表すようになった。

なる, できる, dâyの文法化は、その経路は同じだが、各段階の用法の継続期間や用法の幅の違いが見られる。**なるとできる**は発話時の含意 (文脈依存的意味) だった「変化の要因となった人為の関与」の意味が次第に語義の中に取り込まれていき能力可能を表すようになったが、**dây**は現在でも動作主の能力が問題とならない限り (そういう文脈の助けがない限り) 能力可能とは解釈されない。現代タイ語には能力可能の種類を表し分ける他の形式がある (「**sāmâat** ~ (**dây**) 「~できる」, 「**pen**」 (経験があつて) ~できる」, 「**wây**」 (肉体的・精神的に) ~することが可能だ」)。(注3) **なる**の可能モーダルの機能 (「**小便がならぬ**」など) は、標準語においては「~してはならない (禁止)」「**油断ならぬ**」「**負けてなるものか**」などの慣用

表現を除きすでに失われている。いでくからでくへ、でくからできるへと変化したできるのほうは、現在は能力可能の意味が強い。18世紀頃にまず「(動作性名詞)ができぬ」という形で状況不可能を表すようになり、19世紀初め頃から「～ことができぬ」という形が多く使われるようになり、19世紀末頃から状況可能よりも能力可能を表すことが多くなった。*dây*は可能一般を表すことができる。たとえば、状況可能「*mii thurá? pay mây dâý* ‘用事があって行けない」、能力可能「*yaŋ lék tɛ̃ lɛ̃n pianoo dâý* ‘まだ小さいがピアノが弾ける」、受容可能「*krapăw bay nîi sây khrũaŋ khɔ̃mphiwtễ dâý* ‘この鞆はコンピュータを入れられる」、許可「*khâw maa dâý* ‘入ってよい」など。しかし*dây*によって表されるそれら可能の下位分類の意味は発話の状況や文脈の助けを借りた推論を介して得られる意味であって、*dây*という動詞自体がその固有の意味として表す意味(語義)とは言えない。また、できるはムードコピュラの機能を獲得していない。ムードコピュラとは「言語化されない推論過程を含み、話者が認定の権限を持っている状況で、自分の出した結論を責任を持って伝えるという話し手の態度」を含意として持つ判定詞(コピュラ)のことである。なるのムードコピュラ用法の例として「代金は2千円になります」などが挙げられる。沢田&コモンワニック 1993によると、単純な外延指示機能しか持たない通常の判定詞ではなく「～になる」というムードコピュラを使うとき、話者は経験的知識や状況の証拠に基づいて主観的に「～だ」と認定するのだという。

以下に実際の用例を示しながら、それぞれの語の文法化について詳しく論じていく。

2. 1. なるの文法化

なるは元々、人為の及ばない自発的な自然発生現象を表す出現動詞であった。(1)は日本語最古のコーパスである古事記から拾ったなるの用例である。神の出現をなるが表している。このようになるが表すのは期せずして現れる突発的な出現現象だったため、否定形で使われることはほとんどなかった。またこの段階では、新しい事物が出現する前の状態は何ら含意されなかった。

(1) 天地はじめてひらけし時、高天原になれし神の御名は… (『古事記』712)

次の段階では、自発的出現ではなく、何らかの原因によって引き起こされた変化を表すようになる(表1の第1経路参照)。(2)の例では深い淵から浅瀬への変化をなるが表している。このように新たに出現した状態を古い状態に対比して表現することが多くなる。このなるの意味拡張には、ある事態の出現を古い状態から新しい状態への変化、つまり推移として解釈する我々の「語用論的推論」(Traugott & König 1991; Traugott & Dasher 2002; Heine, Claudi & Hünnemeyer 1991)が関与している。

(2) よのなかはなにかつねなるあすかがは 昨日の淵ぞ今日は瀬になる (『古今集』905-914)

変化が起きて新たな状態に移るという現実世界での推移は、次の段階で思考のレベルに意味拡張され、なるは話者の推論過程を経た主観的な判定や結論(つまり論理世界での推移)を表すムードコピュラとして機能するようになる(佐藤 1998)。この用法はまだ新しく、近代になってからのものと思われる。(3)の例では、話者が春男と太郎のいとは同士の関係について責任をもって判定を下していることがわかる。

(3) 春男は太郎のいとはになります。(沢田&コモンワニック 1993)

表1の第2経路においては、なるは次第に「あきなひ」「詮議」などの動作を表す動作性名詞をその項としてとるようになる。さらに「踊ることがならぬ」のように統語スコープが広がって補語の節をとるようになり、否定形で多く使われるようになる。この段階から状況可能の意味を表すようになったのである。状況可能の意味は否定形の状況不可能から始まった。(4)の例では、お上の命令を翻すということは、たとえばその時代のしきたりにそぐわない、あるいはその特定の状況で当事者に不利益をもたらすといった理由から、つまり状況が許さないで、出現しないという意味をならぬが表している。人間の権限によって事態の出現を阻む禁止の意味もここから生まれた。申 1999によると、江戸時代(1600-1868)の資料ではなるの用例はそのすべてが否定形であり、できるの用例もその9割近くが否定形であるという。

(4) 一旦上頭(うへとう)より仰せ出だされたことは、…翻すことはならぬ (『松樸』16C-early 17C)

次の段階では、状況可能から能力可能へという変化が起こる。ある事態の出現の要因を人間の能力に求める語用論的推論がこの変化に関与している。人一般に適用される可能からある特定の人に適用される可能へ、また一時的な状況を問題とする可能から恒常的能力を問題とする可能へと変化したのである。したがって動作主が明示されることが多くなる。(5)の例では、目に障害を持つ「私」は月を見ることができないという能力不可能の意味を表している。

(5) (盲人なので)私は月見ることにはなりませんによって… (『月見座頭』18C-early 19C)

19世紀末にはなるの可能モーダルとしての使用は減少し、それに代わってできるの可能モーダルとしての使用が増大した (原口 1985; 渋谷 1993; 申 1999)。最終的には能力可能を表すなるは姿を消した。

2. 2. できるの文法化

できるの原形はいでくである。室町時代 (14-16 世紀) から語形変化が始まった。まずいでくがでくに縮まり、さらに活用範疇が変わって力行変格活用だったでくが上一段活用のできるに変化した。できるもなると同じく自発的且つ突発的出現を表す出現動詞であった。(6)の例では月の出現をいでくが表している。

(6) 倉橋の山を高めか夜隠りに出で来る月の光乏しき (『萬葉集』 770)

次の段階では、やはりなると同じく、推移を伴う物事の出現を表すようになる。しかしなると異なるのは、誰かの意志的な行為によってその変化が引き起こされたという解釈が強くなることである。(7)の例では料理人の仕業によっておいしいとろろ汁が出現したことをできるが表している。このできるの意味拡張には、当該事象が出現する背景には誰かのコントロールが働いていると解釈する語用論的推論が関与している。

(7) ことにけふのことづて汁 (とろろ汁) は、いつにまさりて一入 (ひとしお) 出来たる (『軽口露がはなし』 1691)

可能モーダルへの変化もなると同じ段階を踏む。まず動作性名詞を項としてとり、次に統語スコープが節まで広がり、否定の形で状況不可能を表すようになる。ただしできぬはならぬと異なり、「禁止」の意味を表すことはない。(8)の例は、飽食や女遊びの誘惑にさらされ、金を持って帰るという事態は起こらないという状況不可能の意味を表している。

(8) 越後者だから、めつたな事は云れませんが、あれも所によつては、魚が澤山んで値が安し、女が美しくて恰好といふもんでござへますから、江戸から行ても、不自由はなし。其代には江戸へ金を持って歸ることは出来ません。あれば有限つかふといふ所さネ (『浮世風呂』 1809)

また、(9)の例のように一時的な動作主の能力の欠損によってある事態が起こらないという意味も表すようになっていく。

(9) 腰が抜けて逃 (に) げる事が出来ませんで (『業平文治漂流奇談』 1879)

次の段階の変化はなるよりできるのほうに顕著に見られる。動作主が明示され、その動作主の能力によって事態の出現が可能になるという能力可能の意味をできるが頻繁に表すようになっていくのである。(10)の例は、英国に留学していたから英国流儀の様々なことができるという能力可能の表現である。一般に能力可能表現は否定表現より肯定表現のほうが多い。何かができるということのほうが (無数にあるできないことより) 高い情報価値を持ち、言及に値するからであろう。能力可能を表すようになったこの段階からできるの肯定形使用が再び増えていくことになる。

(10) 兎も角も、流石は留學しただけ有りて、英國の事情、即ち、上下議員の宏壯、龍動府市街の繁昌、車馬の華美、料理の献立、衣服、杖履、日用諸雑品の名稱等、凡て閭巷猥瑣の事には、能く通曉してめて、骨牌を弄ぶ事も出来、紅茶の好悪を飲別ける事も出来、指頭で紙巻烟草を製する事も出来、片手で鼻汗を拭く事も出来るが、其代り日本の事情は皆無解らない (『浮雲』 1886)

できるの用例には「できるものか」といった反語形式や「よくできたものだ」といった感嘆形式も多い。(11)の例は「普段仕付けないことができるものか、いやできない」という反語表現である。(12)の例は「(お前さんは弱虫だからできないと思っていたのに) 2人を相手によく斬り合うことができたものだ」という感嘆表現である。

(11) ナニおめえだっても仕つけねへ業 (こと) が出来るものか (『春色梅兒譽美』 1832)

(12) お前さんはまことに弱虫だと思っておりましたのに二人なんぞとよく斬り合うことが出来ましたねへ (『春色英對暖語』 1838)

一般に反語表現には「現実世界では、起きてほしくとも起こり得ない当該事態が、仮想世界では起こり得る」という語用論的推論が関与している。また感嘆表現には「起こるのは仮想世界だけであって、現実世界では起こらないと思っていた当該事象が、期待に反して実際に起こったのは驚くべきだ」という含意がある。できるが肯定形の可能表現にも使われるようになったきっかけは、こうした反語表現や感嘆表現におけるできるの使用 (仮想世界での望ましい事態の出現を表すこと、現実世界での期待に反した事態の出現を表すこ

と)にあるのではないかと考えられる。

2. 3. *dây*の文法化

まずタイ語の言語学的特徴について述べる。タイ語は中国語と同様、音韻面からは声調言語に分類され、語構成の面からは孤立語に分類され、文章構成の面からは主題言語 (Topic-Prominent language) (Li & Thompson 1976) に分類される。文法範疇 (定・不定の区別も含む) の明示が必須ではない点も中国語と似ている。ただしタイ語は中国語ほど複合名詞や複合動詞が固定化、形式化しておらず、機能語の文法化の度合いも比較的低い。また、タイ語の基本語順は中国語と同じSVOだが、名詞修飾語は中国語と異なり名詞の後ろに置かれる。タイ語が属するタイ・カダイ語族は、シナ・チベット語族 (中国語やビルマ語など) と同族であるのか、あるいはオーストロネシア語族 (マレー語やタガログ語など) とともにオーストロ・タイ語族を形成するのか、研究者の意見が分かれている。いずれにせよ、言語形式の借用によって異系統とされる近隣諸語 (クメール語、ベトナム語など) と似ている面が多々ある。

タイ語の古い時代の言語資料は少なく、その多くが石に刻まれた碑文である。タイ語最古のコーパスは13世紀末 (スコータイ王朝時代) に刻まれたと推定されるラムカムヘン王碑文である。スコータイ王朝およびその次のアユタヤ王朝の時代の石碑文には、*dây*が何らかの数量概念を表す名詞句を後ろに従える「*dây* 数量名詞句」という形式が多数使われていた (高橋 2005)。これまで見逃されてきたこの言語事実 (注1 参照)こそが、*dây*もなるやできると同じように元々は出現動詞であったこと的有力な証拠である。タイ語の出現動詞は出現物を表す名詞句を後ろに従えるという統語特徴を持つ (注2 参照)。当時*dây*は出現動詞であったからこそ「*dây* 数量名詞句」という統語形式を持ち、「ある数量が出現する、ある数量に達する」という意味を表すことができたのである。(13)の例では「108 色」という色彩の数の出現が*dây*によって表され、(14)の例では「750 (年)」という時間数量 (期間) の出現が*dây*によって表されている。(注4)

- (13) mii laay ?an *dây* róoy pèet s̄ii sòon
 exist stripes RELATIVE PRONOUN DAY 108 color shine
 輝く 108 色の模様がある。(S)
- (14) sàkkaràat *dây* cèt róoy hàa s̄ip
 era DAY 750
 (ある紀元からの) 年は 750 に達する (S)

また*dây*は出現動詞の他にも、ムードコピュラとしての機能もあったと思われる。(15)の例では、話者の推論過程 (計算) を経て得た「1,946 年になる」という結論を*dây*が表している。(注5)

- (15) phĩ? càk náp d̄uay pii *dây* phan k̄aw róoy s̄ii s̄ip hòk pii
 if MODAL count with year DAY 1,946 year
 年という単位を使って数えれば、1,946 年になる (S)

スコータイ王朝時代にはすでに数量概念を表す名詞句以外のモノ一般を表す名詞句も*dây*の後ろに現れるようになっていた。現代タイ語でよく使われる「*dây* モノ名詞句」という形式である。(16)の例では王国の出現を*dây*が表している。

- (16) ph̄ii kuu taay cwɿŋ *dây* mwaŋ k̄ɛ kuu tháŋ klom
 elder brother PRONOUN die then DAY kingdom to/for PRONOUN whole
 私の兄が死に、王国すべてが私のもとに出現した (私は王国すべてを手に入れた) (S)

Meesat 1997によると、かつて*dây*の後ろに現れる名詞句の指示物は必ず「欲しいモノ、価値あるモノ、重要なモノ」であったという。スコータイ王朝時代の石碑文には「*dây* 数量名詞句」という形式と並んで「*dây* モノ名詞句」という形式も相当数あることから、スコータイ王朝時代より前に「*dây* 数量名詞句 ‘数量が出現する’」から「*dây* モノ名詞句 ‘大切なモノが出現する’」へという意味拡張が起こっていたと考えられる。(16)のように与格前置詞*k̄ɛ*が人間 (出現物を手に入れることになる人) を表す名詞句を伴って*dây*動詞句に後続する形——「*dây* モノ名詞句 *k̄ɛ* 人間名詞句 ‘人にモノが出現する’」——も少なからずある。結果的にモノを手に入れる人を表す名詞句が与格でマークされていた事実も*dây*が出現動詞であったことの傍証となる。(注6) *dây*は中国語の得のような本来的に動作主名詞句を主語にとる動詞ではない。現代タイ語でも*dây*は「*con cay* ‘故意である’」「*phayaayaam* ‘努力する’」などの動作主の意志を表す語と親和性を持たない。したがって、*dây*の前に人間名詞句が置かれる場合も、その名詞句の意味役割は動作主ではなく、むしろ経験者と見るべきである (Takahashi & Methapisit 2004)。人間名詞句が*dây*の前に現れる「人間名詞句 *dây* モノ名詞句」という形式はスコータイ王朝時代からすでに見られるが、その人間名詞句は主語というより (物事が出現する場を表す) 所格の名詞句が主題化された (topicalized) ものと解釈すべきであろう。(17)の例では、王が主題となり、その王のもとに国が出現したこと、即ち国が王のものになったことが*dây*によって表

されている。Meesat 1997や Enfiled 2000, 2003, 2004 がタイ語あるいはラオス語の *dây* の基本義を「あるモノがある人のモノになる ; acquire = come to have (possess)」としているのは、この形式が *dây* のもっとも基本的な統語形式であると見ているからであろう。

- (17) *phôo khũn* *baaŋklaaŋhăw* *dây* *muawŋ* *sïisatchanaalay*
king PROPER NOUN DAY kingdom PROPER NOUN
バンクランハオ王のもとにシーサッチャナライ国が出現した (バンクランハオ王はシーサッチャナライ国を手に入れた) (S)

しかしスコータイ王朝時代やアユタヤ王朝時代には、人間名詞句だけでなく場所名詞句が主題となる場合が少なくなかった。(18)の例では仏像の身体部位を各場所で次々に発見する状況が述べられている。それぞれの場所でそれぞれのモノが出現したのである。

- (18) *laaŋ hêeŋ* *dây* *khoo* *dây* *ton*
some places DAY neck DAY body
laaŋ hêeŋ *dây* *phôm* *dây* *khěen* *dây* *tiin*
some places DAY hair DAY arm DAY foot
ある場所には首、胴体が出現し、ある場所には髪、腕、足が出現した (仏像の身体部位があちこちに散らばっていて、ある場所ごとに行くごとにある身体部位を見つけていった) (S)

(17)のような「人間名詞句 *dây* モノ名詞句」という形式が表す意味は、(18)のような「場所名詞句 *dây* モノ名詞句」という形式が表す意味と基本的には変わらず、いずれも「*dây* モノ名詞句 ‘モノが出現する’」という形式の下位分類形式であるといえる。両形式は「主題名詞句 (=人間や場所を表す名詞句) [*dây* モノ名詞句]」としてまとめられる。

各時代のコーパスデータを分析した結果、「*dây* 数量名詞句 ‘数量が出現する’」という形式を含む構文が、表2と表3 (括弧の中の数字は用例番号) に示すような段階を経て、「変化とその結果状態」を表す形式と「可能」を表す形式 (可能モダリティ) へ発展していった可能性が強いことがわかった。(注7) (注8) いずれも「*dây* 数量名詞句」が後続節 (句) だった。「可能」を表す形式のほうは、古い時代には *lœ* などの接続詞が使われ、現代タイ語でも「動詞句 *kôo* *dây*」のように間に *kôo* という接続詞が入る場合がある。おそらく元々接続詞を介して2つの節が繋がっていたものが次第に接続詞が入らない並列節を許すようになっていったのではないかと思われる。(注9)

「出現」から「変化とその結果状態」へ :	
[<i>dây</i> 数量名詞句] (13)(14)	
> [数える・高い etc.] [<i>dây</i> 数量名詞句]	数えて etc.、数量が出現する (ある数・高さ etc.になる) (19)
> [与える・取る etc.] [<i>dây</i> 数量名詞句]	与えて etc.、数量が出現する (ある個数・容量 etc.になる) (20)
> [居る・植える etc.] [<i>dây</i> 数量名詞句]	住んで etc.、数量が出現する (ある期間になる) (21)
> [動詞句] [<i>dây</i> 名詞句]	～してモノが出現する (手に入る) (22)
> [<i>dây</i> 名詞句]	モノが出現する (手に入る) (17)

表2 : *dây* の「出現」から「変化とその結果状態」への意味変化

「出現」から「可能」へ :	
[<i>dây</i> 数量名詞句]	
> [<i>hăa</i> モノ名詞句] (接続詞) [否定辞 <i>dây</i> 数量名詞句]	モノを探す、数量が出現しない (23)
> [<i>hăa</i> モノ・コト名詞句] (接続詞) [否定辞 <i>dây</i>]	モノ・コトを探す、出現しない (24)
> [動詞句] (接続詞) [否定辞 <i>dây</i>]	～が、出現しない (不達成) (25)
> [動詞句] 否定辞 <i>dây</i>	～が出現し得ない (状況不可能) (26)
> [動詞句] <i>dây</i>	～が可能だ (27)

表3 : *dây* の「出現」から「可能」への意味変化

前者の「変化とその結果状態」を表す形式の文法化経路の特徴は以下の通りである。数量名詞句を含む初期段階では、「数えるという過程を経てある数量が浮かび上がる」という思考が反映されたものであったと思われる。続いて、後続動詞句の *dây* の後ろに現れる名詞句が、数量概念を表す名詞句からモノ一般を表す名詞句に——「*dây* 数量名詞句」から「*dây* モノ名詞句」に——変わった。つまり、特定の意味 (数量) を表す名詞句だけに限定されていたのが、その他の意味 (モノ一般) を表す名詞句も許容されるようになった。意味の一般化が進んだといえる。現代タイ語では「人のもとにモノが出現する (その結果、その人がそのモノを手に入れる)」という意味を表す「人間名詞句 [*dây* モノ名詞句]」という形式がよく使われることはすでに述べたが、その含意の部分である「その結果、その人がそのモノを手に入れる」という意味は、この

「変化とその結果状態」を表す形式が定着したことによって生まれてきた意味であろう。特にそのモノがその人の「欲しいモノ、価値あるモノ、重要なモノ」であれば、その人は自分のもとに出現したそのモノを自分のモノにする。ごく自然なことである。

後者の「可能」を表す形式(可能モーダル)の文法化の特徴は以下の通りである。「変化とその結果状態」を表す形式の場合は「*dây* 数量名詞句」が「*dây* モノ名詞句」へ変化したが、「可能」を表す形式の場合は、否定辞を伴う「否定辞 *dây* 数量名詞句」という形から「数量名詞句」が落ちて「否定辞 *dây*」に変化した。スコタイ王朝時代およびアユタヤ王朝時代の用例を見ると、動詞句に後続する *dây* はそのほぼ7割が否定形である(高橋 2005)。多くの場合、先行節(句)には「探す」という意味を表す *hăa* という動詞が現れ、後続節(句)の「否定辞 *dây*」は「(出現してほしい物事であるのに、あるいは、出現しないはずの物事なのだから)探しても出現しない」という意味を表す。次第に「否定辞 *dây*」は様々な意味の先行節(句)をとるようになり、「不達成」を表すようになっていく。そして「[動詞句] 否定辞 *dây*」という形式が固定化され、「状況不可能」を表す可能モーダル形式として認識されるようになる。そこから肯定形の「[動詞句] *dây*」という形式が派生し、「可能」一般を表すことができる可能モーダルとして機能するようになった。

以下に具体例を挙げて解説を加える。まず「変化とその結果状態」を表す形式の例から見ていく。

- (19) *dûay kwâan dâý sîp sǝŋ waa læ sǝŋ sǝk*
with wide DAY 12 wah and 2 cubit
dûay sũn dâý sîp cèt waa khâa khǝen
with high DAY 17 wah additional arm
広さは12ワー(両腕を広げた長さ、2m)と2ゾーク(肘から中指の先までの長さ、50cm)、高さは17ワーとさらに1腕の長さになる(S)
- (20) *tɛɛ ʔuaythaan bǝa dâý láan sǝi sǝen sǝi muwun*
CONJUNCTION give alms cowrie shell DAY 1,440,000
ピア(タカラガイ貨幣)を施し、1,440,000になる(S)
- (21) *plùuk máy taan nǝi dâý sǝp sǝi khâaw*
grow plant palmyra palm this DAY 14 year
このターン(砂糖ヤシ)の木を育て、14年になる(S)
- (22) *kuu pay thǝo bân thǝo muwan*
PRONOUN go attack country attack country
dâý cháan dâý ŋuan dâý pua dâý naan
DAY elephant DAY elephant DAY man DAY woman
dâý ŋuan dâý thǝoŋ
DAY silver DAY gold
私は国々を攻め、象が手に入り、人々が手に入り、金銀が手に入った(S)

*dây*の後ろの名詞句は、(19)(20)(21)の各例では数量概念を表している。「[動詞句] [*dây* 数量名詞句]」という形式によって、(19)では建築物の広さが25尺、高さが34尺余りになることが表され、(20)では金銭を施して144万になることが表され、(21)では木を育てて14年になることが表されている。一方(22)の例では、*dây*に続く名詞句は象や人々や金銀といったモノを表している。国々を攻撃した結果それらのモノが出現したことが「[動詞句] [*dây* 名詞句]」という形式によって表されている。このように *dây* は後続動詞句に用いられて結果としての数量やモノの出現(変化とその結果状態)を表すようになったが、さらに人間名詞句が主題となる場合には、その人のもとにモノが出現するという意味を明示的に表す他、その人がそのモノを手に入れるという非明示的意味(含意)も伴うようになる。そうした含意形成の背後には、「人のもとにモノが出現すれば、当然そのモノはその人のモノになる」と解釈する我々の語用論的推論がある。(17)のような「*dây* 名詞句」という形式は、「[動詞句] [*dây* 名詞句]」という形式から派生したものであると考えられる。なお、「[動詞句] [*dây* 数量名詞句]」という形式は現代タイ語では使われる頻度が減っている。特に先行動詞句に「広い、高い、長い」などの状態動詞を含む形式は現在ではほとんど使われない。*dây*を介さず直接数量名詞句が添えられたり、*dây*の代わりに *pen* が使われたりする。

(23)から(27)の例は「可能」用法の例である。

- (23) *fũŋ khon ʔan cæk rúu bun tham*
people RELATIVE PRONOUN MODAL know virtue right principles
hăa mí? dâý lăay læy
seek NEGATIVE DAY many INTENSIVE
善業や徳(仏法)を知ろうとする人々を探しても決して多数にならない(S)
- (24) *hăa khon rúu cæk théɛ læ mí? dâý læy*
seek person know true CONJUNCTION NEGATIVE DAY INTENSIVE
真に知っている人を探すが、全く見つからない(S)

- (25) **càk** **náp** **lɛɛ** **míʔ** **dây**
 MODAL count CONJUNCTION NEGATIVE DAY
 数えようとするが、数え切れない (それほど数が多い) (S)
- (26) **yùu** **bòɔ** **dây**
 stay NEGATIVE DAY
 居ることができない (A)
- (27) **phráʔoŋ** **pen** **phanákŋaan** **càʔ** **ráksáa** **hây** **hǎay** **dây**
 PRONOUN COPULA official MODAL cure CAUSATIVE disappear DAY
 お役人様は治療をして直すことができる (R)

(23)の例では、先行節(句)の目的語である「善業や徳(仏法)を知ろうとする人々(仏法に帰依する人々)」を表す名詞句が主題として文頭に出ている。それらの人々を探しても多数は出現しないということを表している。(24)の例は、(23)と同じ動詞が使われているが、先行節と後続節が接続詞 **lɛɛ** で結ばれており、並列節であることがはっきりしている。また、(23)の **dây** は数量を表す名詞句を伴っていたが、(24)の **dây** は単独で使われている。「真に知っている人を探す、そして、全く出現しない」ということは、そういう人は全く見つからないという意味である。(25)の例は、「否定辞 **dây**」の意味が特化して先行節にどんな動詞が来ようと「不達成」の意味を表すようになったことを示す例である。「数える、そして、達成しない」ということは、数えても数え切れないという意味である。(26)の例は、さらに「否定辞 **dây**」の意味の特化が進み、現実の「不達成」を表すのではなく「状況不可能」というモーダルな意味を表すようになったことを示す例である。(26)は状況が許さず居ることができないという意味である。(27)の例は、**dây** が肯定形で「可能」を表すようになったことを示す例である。(27)は治療をして直すことができるという能力可能の意味を表している。

3. 考察

本稿の分析から、**なる**、**できる**、**dây** は同じ意味用法を同じ順序で獲得してきたことが明らかとなった(表1参照)。表1の第1経路の意味用法を表4にまとめ、第2経路の意味用法を表5にまとめた。「出現」という最初の意味用法から派生した「変化とその結果状態」、「ムードコピー」¹、「可能(状況可能および能力可能)」というそれぞれの意味用法について、それらの意味用法が生まれた経緯に関わっていると考えられる言語使用者の概念操作(推論、認知様式)の内容を括弧内に示した。

出現(原義)	自発的且つ突発的な、自然発生の出現現象を表す
変化とその結果状態	推移を伴う物事の出現を表す (「旧態から新態へ変化したのだろう、人為の関与があったのだろう」という推論)
ムードコピー	主観的な判定を表す (論理世界の「推論を経て到った結論」という抽象的意味が現実世界の「変化とその結果状態」という物理的意味に重ね合わされて理解される)

表4: 第1経路の意味用法

出現(原義)	自発的且つ突発的な、自然発生の出現現象を表す
可能	状況的に不可能(あるいは可能)であることを表す (「出現してほしい当該事態が出現しないのは状況が許さないからだろう」という推論)
状況可能	
能力可能	

表5: 第2経路の意味用法

ここでは、本稿の分析結果から以下の2つのテーマを取り上げて考察する。

3. 1. 語用論的強化

本稿で考察した**なる**、**できる**、**dây**の意味変化は、話し手・聞き手が言語使用の中で行う語用論的推論が語や構文の意味をよりモーダルなものにしていく「主観化」(Traugott 1995)の例であるといえる。それは、ある状況のもとで意志疎通の円滑化に寄与する含意(文脈依存的意味)だったものが、次第に慣用化が進み、発話時の文脈や状況を離れてもその語自体の意味として解釈されることが可能になった、即ち語義として確立された、いわゆる「語用論的強化」(Traugott 1988, 1989; Traugott & König 1991)の結果であるといつてよい。語用論的強化の正当性を示すひとつの実際例を本稿は提示した。

3. 2. 描写類型: 「動作主描写」対「出来事の移り変わり描写」

状況可能の「状況」とは一般的に起こり且つ一時的なものであるのに対し、能力可能の「能力」とは個別の動作主に備わっている永続的なものである。特定個人に焦点を当て、事態の出現を可能(不可能)にした

原因をその特定個人の不変的能力に帰するのが能力可能の考え方である。日本語およびタイ語の出現動詞はまず状況可能を表すようになり、それから能力可能も表し得るようになったことを本稿は明らかにした。本稿や渋谷 1993 が主張するこの「状況可能から能力可能へ」という可能モーダルの意味変化の方向性は「能力可能から状況可能へ」というこれまでの通説とは逆である。この対照的な2つの方向は「動作主指向的な言語 (DO-languages)」対「出来事全体把握的な言語 (BECOME-languages)」という2つの言語類型 (池上 1981; Ikegami 1987; Ikegami 1991) を反映しているのではないと思われる。日本語は動作主に焦点を当ててその動作主の動向を中心に出来事を描写するのではなく、動作主やその他の事象参加者すべてを含む出来事全体の移り変わりを描写する傾向が強い言語であることが指摘されているが (Monane & Rogers 1977; Hinds 1986)、タイ語も同じ傾向が強いと思われる。そして、その言語類型こそが、「状況可能から能力可能へ」という意味変化の方向性の理由であると考えられる。日本語やタイ語では、まず人間 (動作主) の意志や能力ありきという発想ではなく、むしろ事象の移ろいに翻弄され、状況に左右されるいわば受け身の人間 (経験者) が描写される傾向が強いと言ってもよい。

このように出来事の移り変わりを描写する傾向が強い日本語やタイ語は、動作主の動向を描写する傾向が強い英語や中国語とは「描写類型」が違うと言えるだろう。系統的關係や地理的分布あるいは言語形式の異同だけに注目するのではなく、個々の言語共同体で様式化されているこうした「描写類型」に注目することも言語類型論、ひいては文法化理論を含む意味変化理論においては重要であることを強調したい。

4. おわりに

本稿の研究は次の3点において意味変化理論および文法化理論の発展に寄与すると思われる。第1に、出現動詞が可能モーダルおよびムードコピュラの起源語であることを指摘し、出現という事態の認知的原初性を示唆した点。第2に、日本語とタイ語という系統的にも異なり地理的にも離れた言語で、出現動詞から可能モーダルへという共通の文法化が起きており、さらに状況可能モーダルから能力可能モーダルへという意味変化の方向性が同じであることを明らかにした点。第3に、意味変化理論を構築する際には、言語ごとの「描写類型」にも留意すべきであることを強調した点。

謝辞

草稿の段階で、タサニー・メタピシット氏から有益なコメントをいただいた。記して感謝の意を表したい。なお本稿の不備はすべて筆者の責任による。

注

1. 日本語の可能モーダル **なるとできる** の文法化については渋谷 1993 が豊富な資料を用いて詳しく分析している。タイ語の可能モーダル **dây** の文法化については渋谷 1993 ほど詳細な先行研究はない。ただし Meesat 1997 が特に **dây** の「実現 (realization, realis)」用法——その統語形式は「**dây** 動詞句」——について古い時代のコーパスから実際の用例を収集して分析を試みている (しかし本稿では **dây** の「実現」用法への文法化は扱わない)。Enfield 2000, 2003, 2004 はタイ語と系統的に近いラオス語の **dây** の文法化経路について具体的な仮説を提示している。先行動詞句の後ろに現れる自動詞としての「success (達成)」の意味 (「**nàn sên dâi** 座って試験を受け、合格した」など) から「can (可能)」の意味へ発展していったという仮説である。基本的な変化の方向性については本稿の仮説と変わらないが、Enfield の仮説は以下の点で本稿の仮説と異なる。(1) Enfield は **dây** の可能モーダルへの意味拡張に否定形が関与していると考えていない。(2) **dây** の基本義は「acquire = come to have (possess)」であるとする Enfield は、「come to have」という概念と「can」という概念の間にはメトニミーの関係がある、即ち「あるものを所有することは往々にしてあることができる能力を持つことにつながる」と述べ、「success」から「can」への意味変化の背景にそうした推論が絡んでいることを示唆している。しかし Enfield はこの仮説を裏付ける古い時代の言語資料を示していない。Enfield の仮説は通時的調査によって得られた言語事実を基に構築されたものではないのだろう。タイ語の **dây** の意味変化を分析した Meesat 1997 も、**dây** は元々「**sij nùn tòk pen khǒn phúu nùn** ‘あるモノがある人のモノになる’」という意味を表していたと述べている。しかし Meesat の挙げている用例にはスコタイ王朝時代およびアユタヤ王朝時代 (13-18 世紀) に頻出する「**dây** 数量名詞句」という統語形式がなぜかひとつも含まれていない。いずれにせよ、所有者となる人間の存在を前提とする「come to have (possess)」という意味は、現代タイ語においてもなお、人間を主題とする文脈で含意される意味であって、**dây** の基本義とは言えない (Takahashi & Methapisit 2004)。
2. タイ語の **dây** (およびその他の Tai languages でそれに相当する語) と中国語の **得** (およびその他の Sinitic languages でそれに相当する語) は同源語かあるいは借用関係にあるのかといった出自の問題は、多くの研究者がはっきりした証拠がないとして明言を避けている。しかし Bisang 1996 のように両者は同源だとする研究者もいる。かつてタイ語の **dây** は出現動詞であったという本稿の仮説が正しいとすれば、意志的な「得る (get)」という意味を表す2項動詞であった **得** と人間の意志が及ばない「出現」という意味を表す1項動詞であった **dây** との関連性は薄い。ただし、タイ語の存在動詞および出現動詞は1項動詞ではあるが、存在物・出現物を表す名詞句は動詞の後ろ (通常目的語が現れる位置) に現れる。例えば、「**mii** 存在物を表す名詞句 ‘～がある’」、「**kəət** 出現物を表す名詞句 ‘～が出現する’」など。
3. しかし **dây** (およびその他の Tai languages で **dây** に相当する語) の語義には能力可能 (ability, capability) が含まれていると考える研究者もいる (Matisoff 1991; Diller 2001; Kullavanijaya 1996; Enfield in press)。**dây** の可能モーダルとし

- ての意味を英語の可能モーダル *can* の意味に無意識のうちに重ね合わせた結果ではないかと思われる。タイ語の可能モーダルの意味特徴についての本稿の見解は、大河内 1980 や三上 1992 に近い。
4. 当時のタイ語文字の音価に関する知識がないため、本稿の用例は各石碑文に付されていた読解文のほうを採用し、現代タイ語の音価にそって表記した。各用例に付した記号はその石碑文が刻まれた時代を表す： S=スコタイ王朝時代 (13-15 世紀)； A=アユタヤ王朝時代 (14-18 世紀) (スコタイとアユタヤの両王朝は併存した時期がある)； R=ラタナコシン王朝時代 (1782-現在)。
 5. 「数量」を同定するムードコピュラの *dây* は、「質」を同定するムードコピュラの *pen* と対比を成している。
 6. しかし Meesat 1997 は「*kèc* 人間名詞句」の意味を考慮することなく、「*dây* 物事名詞句 *kèc* 人間名詞句」という形式も「人間名詞句 *dây* 物事名詞句」という形式と変わらず「能力によって、あるいは機会に恵まれて、あるいは必要性があるので、事物を手に入れる」という意味を表す形式であると考え、そのどちらも同じ他動詞カテゴリーに分類している。
 7. 「なるやできる」にはない「実現」用法（「*dây* 動詞句」）については考察を省く。
 8. 以下の *dây* を含む慣用表現もこれらの統語形式のいずれかから派生したものと思われるが、紙幅の関係上、その分析を割愛する：「名詞句・動詞句 *hǎa mǐ? dâi* ‘～はあり得ない」、 「*hǎa* 名詞句・動詞句 *mây* ‘～はあり得ない」、 「名詞句・動詞句 *kôc dâi* ‘～でもよい」、 「動詞句 *con dâi* ‘ついに～」。
 9. 幅広い年代の資料を用いて中国語の結果構文の成立過程について研究した Shi 2002 は、中国語の「動詞句 *-bude* (不得)」という不可能 (not able) を表す形式の変遷を次のように想定している。接続詞によって節が繋がられていた頃、後続節に目的語を伴わない「*bu de* ‘得ない」という形が現れることがあったのが、接続詞の使用が必須でなくなって先行節と後続節が隣接するようになると、後続節の「*bu de* ‘得ない」は次第に実質の意味を失っていき、結果として「動詞句 *-bude*」という不可能を表す形式が成立した。要するに、「動詞句 接続詞 *bu de* ‘～したが、得なかった」という形式から「動詞句 *-bude* ‘～することができない」という形式に変化したというのである。スコタイ王朝時代 (13-15 世紀) のコーパスを読むと、タイ語もその頃は接続詞によって節を連結することが多かったことに気がつく。前述の通り、動作主の意志的行為を表す動詞 (action verb) である *得* の意味変化と非意志的な瞬間的变化を表す動詞 (achievement verb) である *dây* の意味変化とを平行に論じることはできない。しかし中国語とタイ語は同じ孤立語である。したがって、接続詞の使用が減少し先行動詞句と後続動詞句が隣接するようになったことが後続動詞句に使われていたそれらの動詞の意味変化を引き起こした根本要因であることは、両語ともに当てはまるであろう。

参考文献

- Bisang, Walter. 1996. Areal typology and grammaticalization: Process of grammaticalization based on nouns and verbs in East and mainland South East Asian languages. *Studies in Language* 20:3, 519-597.
- Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca. 1994. *The Evolution of Grammar: Tense, Aspect, and Modality in the Languages of the World*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Diller, Anthony. 2001. Grammaticalization and Tai Syntactic Change. In Tingsabath, M.R. Kalaya and Arthur A. Abramson (eds.) *Essays in Tai Linguistics*, 139-175. Bangkok: Chulalongkorn University Press.
- Enfield, Nicholas James. 2000. *On the Polyfunctionality of 'Acquire' in Mainland Southeast Asia: A Case Study in Linguistics Epidemiology*. Ph.D. dissertation, University of Melbourne.
- Enfield, Nicholas James. 2001. On genetic and areal linguistics in mainland South-East Asia: Parallel polyfunctionality of 'acquire'. In Aikhenzald, Alexandra and R.M.W. Dixon (eds.) *Areal Diffusion and Genetic Inheritance*, 255-290. Oxford: Oxford University Press.
- Enfield, Nicholas James. 2003. *Linguistic Epidemiology: Semantics and Grammar of Language Contact in Mainland Southeast Asia*. London: Routledge Curzon.
- Enfield, Nicholas James. 2004. Areal grammaticalization of postverbal 'acquire' in mainland Southeast Asia. In Burusphat, Somsong (ed.) *Papers from the Eleventh Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society 2001*, 275-296.
- Enfield, Nicholas James. in press. Micro- and macro-dimensions in linguistic systems. In Marmaridou, Sophia, Kiki Nikiiforidou, and Eleni Antonopoulou (eds.) *Reviewing Linguistic Thought: Converging Trends for the 21st Century*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 原口裕. 1985. 「可能表現スルコトガデキルの定着」『国語と国文学』62-5, 56-66.
- Heine, Bernd, Ulrike Claudi and Friederike Hünemeyer 1991. *Grammaticalization: A Conceptual Framework*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Hinds, John. 1986. *Situation vs. Person Focus*. Tokyo: Kuroshio.
- Heine, Bernd and Tania Kuteva. 2002. *World Lexicon of Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 池上嘉彦. 1981. 『「する」と「なる」の言語学』東京: 大修館書店.
- Ikegami, Yoshihiko. 1987. 'Source' vs. 'goal': a case of linguistic dissymmetry. In Dirven, René and Günter Radden (eds.) *Concepts of Case*, 122-146. Tübingen: Gunter Narr Verlag Tübingen.
- Ikegami, Yoshihiko. 1991. 'DO-language' and 'BECOME-language': Two contrasting types of linguistic representation. In Ikegami, Yoshihiko (ed.) *The Empire of Signs: Semiotic Essays on Japanese Culture*, 285-326. Amsterdam: John Benjamins.
- Matisoff, James A. 1991. Areal and universal dimensions of grammaticalization in Lahu. In Traugott, Elizabeth Closs and Bernd Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization*, 383-453. Amsterdam: John Benjamins.
- Meesat, Paitaya. 1997. *A Study of Auxiliary Verbs Developed from Verbs in Thai*. Master's thesis, Chulalongkorn University.

- 三上直光. 1992. 「ベトナム語、カンボジア語、タイ語における「可能動詞」」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』24, 329-345.
- Kullavanijaya, Pranee. 1996. Undoing homonymy: Cases in Debao Zhuang and Thai. In Kullavanijaya, Pranee, Amara Prasithrathsint, and Suvanna Kriengkraipetch (eds.) *Collection of Papers on the Relationship between the Zhuang and the Thai*, 78-92. Bangkok: Chulalongkorn University.
- Lamarre, Christine. 2002. 「助詞への道—漢語の“了”、“得”、“倒”の諸機能をめぐって」『認知言語学Ⅱ: カテゴリー化』, 185-215. 東京: 東京大学出版会.
- Li, Charles N. & Sandra A. Thompson. 1976. Subject and topic: A new typology of language. In Li, Charles N. (ed.) *Subject and Topic*, 457-489. New York: Academic Press.
- Monane, Tazuko A. and Lawrence W. Rogers. 1977. Cognitive features of Japanese language and culture and their implications for language teaching. In Hines, John (ed.) *Proceedings of the UHHATJ Conference on Japanese Language and Linguistics*, 129-147. Honolulu: University of Hawaii.
- 大河内康憲. 1980. 「中国語の可能表現」『日本語教育』41, 61-73.
- 佐藤琢三. 1998. 「自動詞ナルと計算的推論」『国語学』192, 107-118.
- 沢田奈保子&カモンオーン・コモンワニック. 1993. 「名詞述語の日・タイ対照研究—認知語用論の観点から—」『言語研究』103, 92-116.
- Shi, Yuzhi. 2002. *The establishment of Modern Chinese Grammar: The Formation of the Resultative Construction and its Effects*. Amsterdam: John Benjamins.
- 渋谷勝己. 1993. 「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33.1.
- 申鉦竣. 1999. 「近代語可能表現の推移—「コトガナル」から「コトガデキル」へ—」『國學院雑誌』100.4, 48-62.
- Shinzato, Rumiko. in press. From “emergence” to “ability”: A case study of Japanese *naru* and *dekiru*. *CLS* 40.
- Sun, Chaofen. 1996. *Word-Order Change and Grammaticalization in the History of Chinese*. Stanford: Stanford University Press.
- 高橋清子. 2005. 「タイ語の石碑文に見られる ๓๕ *dây* の用法」『神田外語大学紀要』17, 295-353
- Takahashi, Kiyoko and Tasanee Methapisit. 2004. Observations on form and meaning of DAY. In Burusphat, Somsong (ed.) *Papers from the Eleventh Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society 2001*, 701-719.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1982. From proposition to textual and expressive meanings: some semantic-pragmatic aspects of grammaticalization. In Winfred P. Lehmann and Yakov Malkiel (eds.) *Perspective on Historical Linguistics*, 245-271. Amsterdam: John Benjamins.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1988. *Pragmatic strengthening and grammaticalization*. *BLS*14, 406-416.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1989. On the rise of epistemic meanings in English: An example of subjectification in semantic change. *Language* 65.1, 31-55.
- Traugott, Elizabeth Closs. 1995. Subjectification in grammaticalization. In Stein, Dieter and Susan Wright (eds.) *Subjectivity and Subjectivisation: Linguistic Perspectives*, 31-54. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher. 2002. *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, Elizabeth Closs and Ekkehard König. 1991. The semantics-pragmatics of grammaticalization revisited. In Traugott, Elizabeth Closs and Bernd Heine (eds.) *Approaches to Grammaticalization*, 189-218. Amsterdam: John Benjamins.
- van der Auwera, Johan and Vladimir A. Plungian. 1998. Modality's semantic map. *Linguistic Typology* 2, 79-124.

日本語資料

- | | |
|-------------------------|-------------------------------|
| 古事記 日本古典文学全集 (小学館) | 浮世風呂 日本古典文学大系 (岩波書店) |
| 萬葉集 1-4 日本古典文学全集 (小学館) | 春色梅兒譽美 日本古典文学大系 (岩波書店) |
| 古今集 日本古典文学全集 (小学館) | 春色英對暖語 (岩波文庫) |
| 松櫨 日本古典文学大系 (岩波書店) | 業平文治漂流奇談 明治の文学3: 三遊亭円朝 (筑摩書房) |
| 月見座頭 日本古典文学大系 (岩波書店) | 浮雲 (岩波文庫) |
| 軽口露がはなし 日本古典文学大系 (岩波書店) | |

タイ語資料

- The Prime Minister's Office, Thailand. 1924/1978. **ประชุมศิลาจารึก ภาคที่หนึ่ง** (石碑文集第1巻). Bangkok: The Prime Minister's Office.
- The Prime Minister's Office, Thailand. 1965. **ประชุมศิลาจารึก ภาคที่สาม** (石碑文集第3巻). Bangkok: The Prime Minister's Office.
- The Prime Minister's Office, Thailand. 1970. **ประชุมศิลาจารึก ภาคที่สี่** (石碑文集第4巻). Bangkok: The Prime Minister's Office.
- The Prime Minister's Office, Thailand. 1974. **ประชุมศิลาจารึก ภาคที่หกตอนที่หนึ่ง** (石碑文集第6巻第1号). Bangkok: The Prime Minister's Office.
- The Prime Minister's Office, Thailand. 1978. **ประชุมศิลาจารึก ภาคที่หกตอนที่สอง** (石碑文集第6巻第2号). Bangkok: The Prime Minister's Office.
- The Bureau of Arts, Thailand. 1984. **จารึกสมัยสุโขทัย** (スコータイ時代の石碑). Bangkok: The Bureau of Arts.
- The National Museum, The Bureau of Arts, Thailand. 1986. **จารึกในประเทศไทย เล่มที่ห้า** (タイ国内の石碑第5巻). Bangkok: The Bureau of Arts.